

応用生物科学部・応用生物科学研究科

I 研究水準 研究 5-2

II 質の向上度 研究 5-3

※「応用生物科学研究科」は、平成 20 年度に「農学研究科」より改組された。

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、平成 19 年度の教員一名当たりの平均論文数 1.03 件である。戦略的で特色ある研究として、国際研究拠点形成促進プログラムや獣医学教育分野で 21 世紀 COE プログラムに採択されるなど、研究教育の拠点が形成されている。マスコミによる報道活動も活発で社会に影響を与える研究が多く実施されている。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金採択率が 4 年間の平均で 34%を保っている。また、平成 19 年度、寄付金、受託研究、共同研究、その他の研究助成などを合わせた外部資金を、3 億 7,922 万円受け入れているほか、学術賞を 7 件受賞していることなどは、優れた成果である。

以上の点について、応用生物科学部・農学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、応用生物科学部・農学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における応用生物科学部・応用生物科学研究科の判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、生物分子科学及び植物栄養学・土壌学の分野で先端的な研究成果が生まれている。卓越した研究成果として、例えば、H5N1 型インフルエンザ A ウイルスのトリ型とヒト型の糖鎖の構造差の違いの研究、L-セレクトインの主要

リガンド 6-sulfo sLeX の皮膚リンパ球ホーミングに関する研究、植物の酸性土壌に対する防御機構を統合的に制御する遺伝子 STOP1 を単離した研究が挙げられる。インフルエンザ糖鎖の研究は、世界トップレベル研究拠点サテライト研究機関選出の基盤にもなっている。社会、経済、文化面では、ベンチャー企業の設立による農業コンサルタント事業や食品鮮度管理士養成事業の展開や、パラポックスウイルス感染症の新しい診断法の開発がある。これらの状況などは、優れた成果である。

以上の点について、応用生物科学部・農学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、応用生物科学部・農学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における応用生物科学部・応用生物科学研究科の判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が 1 件、「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が 1 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。